

「んふあ……。あ、ああっ」

誰にもじかに触れられたことのない場所をぬるぬるした指で触れられ、シャーロットはため息と同時に切ない声をあげる。

仁は、彼女のヒップを抱えこむと、アヌスを指で左右に押しひろげ、ぬめったすばまりへと、亀頭をぐいっと押しつけた。

「くっ、あ、あ、ああっ。い、っつ、ああはああっ」

まだ、亀頭が全部入りきっていないというのに、身体を裂かれてしまうような鋭い痛みが、プリンセスに襲いくる。

本能的につい腰を引いてしまい、痛みから逃れようとしてしまうが、気丈なシャーロットは、浅い呼吸を何度も繰り返して、その衝動をなんとかこらえる。

が、半ばパニック状態になり、子供のようにわめいた。

「……ああ、む、無茶ですわ。っつ、あああ、仁のおつきいんですもの、そ、そんなトコ、無理です。は、入りませんわ」

「だ、いじょうぶ。ほら、力を抜いて」

彼女を落ち着けようと、そのほっそりとした背中を仁が撫でてやる。

「そ、んなこと言われても難しくて。っつあ、あああはあんっ！」

出っ張った亀頭が、数ミリほど彼女のなかへと侵入した。

獯猛なまでの拡張感に、大げさなくらい少女の身体が震えてしまう。

「か、っは。あ、ああっ、や、む、無理、ですわっ」

冷や汗とも脂汗ともわからない、いやな汗が広い額に玉のようににじみでる。

「深呼吸、してみて」

「あう、っはあ。あ、やああ、やああああああっ」

激しく混乱するシャーロットが、首を左右に激しく振りたてる。

と同時に、彼女の豊かな金色の髪が、背中の上で流れるように動く。

彼女の痛みを和らげるため、仁は彼女の股間の端っこに指を滑らせた。しこり勃った真珠を、くりくりとやさしく撫でてやる。

「あ、んんっ！」

すると、一瞬、彼女の力が緩んだ。

その隙を仁は見逃さない。

このときとばかりに、一気に腰を進めた。

「きゃ、ああああっはああうんっ。い、っつ、ううっ。ふう、つくうう」

ついにずると先端の出っ張り、直腸内に埋めこまれてしまい、あまりにも鋭すぎる痛みに、シャーロットはのけぞった。

紺碧の夜空に向かって白い吐息が吐きだされ、闇へと溶けていく。

「い、いたあ……。い、息が、つ、つまって……」

身体を硬直させたまま、苦しそうに言うシャーロット。

「くうう。き、つすぎ、かも」

仁もたまらずうめき声をあげる。

プリンセスのアヌスのなかは、窮屈きわまりなかった。

つるりとした粘膜が、強烈にペニスを締めあげてくる。

ただし、先端の出っ張りがなかへと入ってしまったと、あとはスムーズだった。

やがて、ペニス全体が彼女のなかへと収まった。

とはいえ、普段びつたりと合わさった箇所を極太の棒が貫いているのだ。

シャーロットは、顔面蒼白になり、意識を手放すまいとするだけでいっぱいだった。

「う、ごかすぞ」

「ん、んっ」

仁が腰を引くと同時に、すさまじい拡張感から解放される際に生みだされるところけるような快感がプリンセスに訪れた。

「あ、っは、あああ、んうう。仁……」

痛みが強烈であればあるほど、ほんの少しの快感が何倍にも増幅される。



ヴァギナを貫かれるのとは、また違ったタイプの心地よさに、シャーロットは身震いした。

よくよく注意していないとわからないほどの悦楽。

だが、だんだんと痛みに慣れるに従い、そのちっぽけな悦楽が、風船のようにふくらんでいくのがわかる。

「あ、ああつ。じ、仁っ。な、なんだか、よ、よくなつて……」

無我夢中で仁に報告するシャーロット。

「ああ、俺もだ。一気にいくぞ……」

と、仁がピストン運動を速めようとした、ちょうどそのときだった。

かたんと物音がして、二人は体を硬直させた。

「おー。涼しいねえー。なかは暖房効きすぎてたからさあ」

「うわー。すごい星。きれいー」

「夜の海っていうのもいいねえ」

女子生徒たちが、口々におしゃべりしながら甲板へとあがってきたのだ。

（だ、ダメですわ。仁。や、やめておきましょう）

（そんなこと言っても、このまま収まらねえし……）

（だ、だけど、こんなことしているのがばれてしまったら）

(ばれないようにすればいい)

(そ、そんなっ、じ、仁っ)

プリンセスの制止は、むなしく却下される。

仁は、注意深く、ピストン運動の速度を速めはじめた。

「んっ、ん、っふ……。んふう」

シャーロットは、必死で口もとを手で押さえると、声がもれでてしまうのを防ごうとする。

しかし、粘膜同士がこすれ合う音までは抑えることができない。

ずちゅぬちゅという淫猥な音と、シャーロットの尻たぶに仁の腰が打ちつけられる音がひそやかに夜空へと吸いこまれてゆく。

(あ、だ、だめ。こ、来ないでっ)

人の気配を感じた途端、シャーロットのすばまりは余計にきつく締まり、仁を追いだそうとする。

が、仁はそれ以上の力を持って、雄々しくアヌスを征服していく。

(あ、ああっ、あああああ、も、もおっ。げ、限界、ですわっ)

狂ったように首を振りたてるシャーロット。

(シャル、もう、すぐ、だからっ)